
ヤンデレの幼馴染に死んでも愛され続けて転生後

つんどうら

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレの幼馴染に死んでも愛され続けて転生後

【Zマーク】

Z6530Y

【作者名】

つんざり

【あらすじ】

元精霊ですがやっぱり死んでも解放されませんでした！ 記憶が無くてもヤンデレな幼馴染と、そんな彼に愛されすぎて死にそうだけど夜は熟睡できる不憫娘の、比較的平和な転生後の話。 後日談の後日談です。色々と注意。

(前書き)

残酷描写、近親相姦描写その他に注意。いろいろ注意！

あと前回・前々回より長い期間を詰め込んだので地の文多いです。

ヤンデレの幼馴染シリーズの第三弾です。蛇足な感じです。
できればこちらを先にお読みください。

<http://nocode.syosetu.com/n3147>
y / 本編
<http://nocode.syosetu.com/n3599>
y / 後日談

こちらも一応、読めばより楽しめるかもしれません。

<http://nocode.syosetu.com/n5253>
y / 番外編

覚えている限り、前世で最後の記憶。

「……美奈」

黒い目は少し濁っていて、多分死なんだなあとぼんやりと思つ。ぼたぼたと落下してくる赤い雨。肉のような何かが顔以外のそこかしこから覗いている。

激戦の名残りは凄まじいのに、口については少しも動じた様子が無い。抵抗する気も起きないまま、奴の唇が振ってきて、

「また来世、ね」

舌を、噛み千切らんばかりに噛まれて、いや噛み千切られた気がする。

凄まじい激痛が過ぎ去ると、口が血の味で満たされて、息が殆ど出来なくなつたかと思うとまた唇が深く深く合わせられて、流れる血の全てを舐め取ろうとしているかのように舌が口腔を這い回り、一度離すと血の混じつた血、とこより唾液の混じつた血が糸を引く。

それはまるで、運命でも現しているかのよつな、赤い赤い糸だつた。

「つ……は

ああこれから死ぬつてのに何してんだう。でも、でも、私はこれくらいじや死ねないから、殺すならもつと完膚なきまで殺してくれなきや困るよ、光輝。

その言葉が通じたのか、光輝は懐から緩慢な手付きで短剣を取り出して、にこ、と笑う。

それで私を刺すのかと思つたら、違つた。

よくよく見ればそれは炎の精霊に貰つた短剣だ。炎の力が込められた短剣の表面に赤い光の線が走つていく。その行き着く先にある赤い宝玉が、一瞬光り輝いた。

光輝はそれを、豆腐に包丁を通すようにあつさりと脇の地面に突き刺す。

途端に周囲は眩い橙に包まれる。熱氣にくらくらとする頭で暫くぼうつとしていた。また、光輝の唇が降りてくる。もう離れなくてもいいとばかりの深い口付けに、ますます頭がぼんやりする。頭の奥に、唾液だか血だかが混じりあう淫靡な音がして、一瞬にこが寝室であるかのような錯覚すら覚える。

灼熱の炎は徐々に高熱を表す色に変わつていく。ゆらぐ景色の中、光輝の瞳がゆつくりとその光を失つていくを見つめていた。そして、私も目を閉じる。

なんとなく、私たちに相応しい最期だと思った。

そして私は、精霊として大気に還つた 箸でした。

某大陸で精靈をやつていた私が死に 今度は“ミリシアナ・レーヴィン”という人間に転生して、ようやく6年が経つ。

数千といくつだった私 “ミーナ・ハルベルン”は、ヤンデレの幼馴染の所業に憤ったこの世界の愛の神様（失笑）と戦い、見事に散つた。ああああだからこんな事してたら罰が当たると……！しかし本当にとばっちりだね！ といつかさつきからデジャヴデジヤヴ！

曰く、そんなの恋じやないもんつ、ボクが折角拾つてきてあげたのにまた縛り付けて、天誅なんだから！ だと……あああもうだから！ ボクつ子はトラウマなの！ トラウマー！

最期は確かに、私の魔力が底をついて光輝がボロボロになつて、結局……うん、心中つて言うのかな、あれ。舌噛み千切られたよね……舌……ひいい、思いだしたら痛い！ で、蒸し焼きか。がつりキスしながらついでに腰と首に手が回つてて逃げられないし、なんかもうあそこまでされると諦めも付くよね、うん。

で、ひょつこりといふか今度はしつかり赤ん坊で生まれてきた。気づいたらなんか水の中で周り全く見えないわ妙に生温かいわで混乱してたらうにゅつと……なんて言うか、薄皮一枚隔てた大量の温かいスライムの中を通つているよくな……で、オギヤー。

転生モノは数あれど、胎の中から意識があつたなんて体験は私し

か居るまい。

今世の私も黒髪に銀の目だ。親と違う色の目、特に金銀や赤や水色、翠や黒のはつきりした色というのは精霊の加護を受けていると
言われる。よかつた、無駄に夫婦の不和を招かなくて。

どうやら世界は同じらしく、見知った精霊が寄つてきては『ちつちつー』とか『うわーちまつこー』、何これ手どりなつてんの?』とか『あ、女の子だ』とか言い残していく。見るなああああ!
ある日ついに精霊王まで来て、『うわーちまつこくなつてもうたな、かいらしなー、萌え』と私がうつかり教えた単語を言い放つた。本つ当に威厳無い。ありえない!
などとしているうち、気づいたら精霊のいとし子とか呼ばれててビビッた。

……それは兎も角、だ。

生まれた日から暫くした時に、母のもう反対側の乳に吸い付いた赤子がいる。

はい勿論光輝でしたああああ!

どうやら同時期に生まれたから、乳母という事になつたらしい。記憶は無い……のだろうと推測するけど、本能に従つて乳を吸いながらもこちらをガン見してきたあたり間違いない。

黒い髪に、今度は真つ赤な眼で。顔立ちにも面影がある。どう見てもご本人登場。

というかうちのアルバムにあつた彼の赤ん坊時代にそっくりだ。ちなみに大抵の写真に光輝が一緒に写つてゐるあたりがちょっと恐ろしいです。

あと、やつぱり最初の言葉は「ミーナ」だった。お前……いや、

もう良いわ。うん。

どうやら私は、今世でも解放されそうになかった。

私の父親は非常に忙しい人だ。エノン・レー・ヴィン子爵、また“黒宰相”と呼ばれている人で、年中転げまわるように戦っている。髪も眼も黒いが、黒宰相の由来は大抵の場合目の下がクマで黒くなっているから、らしい。可哀想だけど、仕事が趣味らしいので問題なし。元公爵家次男で、何故に子爵家なんぞに婿入りしたのかは謎である。恋ではないようだ。

母は子爵家の令嬢で、それなりに優しい人だつたけど父の事は嫌つていた。3年前に若い燕と駆け落ちして行方が分かりません。父が哀れすぎて泣ける。

そんな訳で、今世では宰相の「令嬢であり子爵令嬢でもある私が」奴の方は更に上を行つた。知つた時にはちょっと「マジかよ」と口に出しそうになつた。

「ウキ・ティーファス・エレゲイア。

この国では というか大陸では、普通ミドルネームは付かない貴族であつてもそうだ。ミドルネームが付くのは、そつ、王族だけである。というか皇族か。

エレゲイア帝国の、皇帝陛下の第一子。……つまりは、皇太子殿下である。

一瞬でも勝ち組だ私と思つて恥ずかしい。上には上が居るよね、だよね……うん。

エレゲイア帝国は、かつての燥帝国やテンテセア帝国やその他色々、あと榮帝国などなどが寄り固まつて出来た国らしい。今では大陸全土がこの国だ。

私たちが死んでから一千年ほど経つているようで、かつての様子

とは随分変化した。大分、遠い記憶にある地球にも似たような感じになつてゐる気がする。

学校制度も整つたようだ。平民も貴族も入り混じり、基本は6歳から16歳まで10年学校に通つ。17歳から19歳までは、成績優秀者の行く研究院。大学みたいなもんだね。

という訳で本日、入学式でした。

「入学おめでとさん。帰るぞー」

「はい、父上」

「ありがとうござります、陛下」

魔導車（ホバーっぽい車。私の知つてゐる車とは随分違う）の窓から顔を出す、肩まで伸びた黒髪の美丈夫。ノリが大変軽いが、これががうちの皇帝陛下だ。

ちなみに皇妃様は姉御肌でヤンキー臭い。あれはツンデレだ。

相変わらず親の前では完璧なコウキだが、多分完璧に見抜かれている。たまにニヤニヤしてゐるから間違いない。だから多分安泰だけど、大丈夫かこの国。

父が城で働いてゐるから、私もなんだかんだで城で育つて6年。いいのかと思いつつ、やはりと言つてはあれだが、コウキが離してくれないので仕方ない。

車に乗り込む。普通助手席に乗るだろつて、普通に後ろに並んで乗る。ぎちぎちと締め付けられている手がそろそろ色とかやばいので離してほしかったたたたた！

「で、どうだ？ 友達できそつか？」

「いりません。ね、ミーナ」

「あ……は、はい」

同意を求められても困る！　あと手が死にそう！

そういうや前世でもビジネスライクな友人以外いなかつたなと思いつ返す。情というものが愛情だけに偏りすぎて、友情に割く分など少しも無かつたようである。

悲しいことに私も友人は少なかつたけどね！　前世は兎も角、前々世はガチでね！

「ま、良いけどな、それで良いんなら」

「前々問題ありません。ミーナがいれば」

「お前も大概だよなあ。俺に似たかね？」

陛下も大層な愛妻家だ。といつか軽いノリの中にちらつくヤンデレっぷりには眼を逸らさざるを得ない。がんばれ皇妃様、負けるな皇妃様。縛られたような痕の付いた足首とか全く見てません。見てませんから！

「いいえ。ミーナとは、今世だけの付き合いとも思えないで」

「そりや俺だつて、ベラとは前世からの恋人のような気がするさ」

「確信があります。といつか、意図して出来る事ではないでしょ？。俺の目の色以外、被りすぎています」

「ああ……まあ、そうだな」

“「ウキ」という名は比較的ポピュラーらしい。“ミーナ”もだ。何故なら、御伽噺の英雄とその妻の名前だからである。あと“ミツキ”も次点に入るだろ？。

“というか私と光輝です。

勇者「ウキ・ヤシロと精霊ミーナ・ハルベルン。どうしてそうなつたのか、非業の別れを遂げた恋人が別の世界で再び出会い、攫われた精霊を助けて魔王倒してハッピーエンドという御伽噺が桃太郎

並にポピュラーになつていた。更に母親に横恋慕するミシキ・ヤシロでかぐや姫レベルの知名度。あと色々武勇伝もある。……いやあああ！

それはもう子供向けのほほんとした絵本から、大人向けの……その、ドロ沼三角関係近親相姦小説とか。ちょっと私そんなビッチじゃない！ ないから！ いくら何でもそれだけは無い！ 夫と息子の間で揺れ動いてなああああい！！ あげくの果てに「じゃあ3人で」つて小説の中の私は随分アレな性格でした！

「神託まであつちやなー。勇者と精霊の話、息子追加すると教育に悪すぎる」

「それは同感ですね。いくら何でも、母親に恋慕するところは」
口を付いて出よつとした言葉を飲み込む。お前らみたいな性格が遺伝したせいだよ！ と。言つたら不敬罪間違い無しだ、危ない。ファインプレーだ、私の口よ。

記憶にある小学校生活も、多分こんな感じだつたと思つ。クラス分けは平等と見せかけ、ある程度身分で分けられてもいるようだ。そりや平民と皇太子がまともに会話できる訳も無いからなあ。萎縮して。

……「ウキの場合、それだけでもない気がするけど

さて、あの時は「ウキの恐ろしさが勝つてそうでもなかつたんだけど、今回は最初から難易度がハードだつた。日常生活がやばい。まず何がやばいって、「ウキがもてすぎて私にとばっちりが来る。しかも身分としては子爵令嬢でしかないから、それはもう絡まれる。小学生のくせに。

しかしあんなチンケな苛めにやられる私ではない。首を絞められ

るよつマシだ！ いじめられつこ暦数千年を舐めるな！

……そしていじめつこ暦数千年のコウキを舐めるな！

見事に苛め返したようで、数日もすると接触すら無くなつていた。いや、何したんだ本当に。青ざめた顔で逃げていくのは何故だ。何をした純粋培養のお嬢様方に！

「ミーナ、いい夢を見たんだ」

「な、何？」

「君と死ぬ夢」

「よくない！ 全然よくない！」

記憶が無いにも関わらず、相変わらず私達はこんなんだ。

ちなみに敬語をやめたのは大分前です。2人きりの時だけと限定してはいるけど、普通に喋つてよと言われ、無理ですと言つたら首を絞められた。やっぱりかあああ！

染み付いた上下関係というか何と言つか、わかつたわかつたわかつたから離してえええと絶叫して許していただいた。あああ……本当に不敬罪モノだ。しおっぴかれたらどうする！ でもやっぱり、こっちの方が馴染みがあつて楽とも言える。

「そう？ 最高だけど……それとも、他の人と死ぬつもり？」

何で誰かと死ぬのが前提なんだ！ という言葉を飲み込む。待て、目が赤から黒に変わつて。これはガチでやばい。何かどういう仕組みなんだか不明だけど、ヤンデレモードに入ると目が黒くなるのだ。攻撃色。もしくは、パターン黒、ヤンデレです！ みたいな感じ。

じりじりと伸びてくる手からさりげなく逃げる。6歳とはいえ、力は強い。私もだが、ある程度スペックは引き継いでいるようだ…うん、すごい困るよね！

赤ん坊の頃、うつかり陛下の指折つてたし。怖すぎる。私の首とかグシャッといきそうだ。

「いや……あーっと……」

「君が死ぬのは許せないし、俺が死んで君が残されるのも嫌だから。死ぬ時は一緒だね」

「うん……?」

薄らと微笑んで見事なまでの俺ルールを披露。相変わらずだね本当にー!

数年経ち、6年目、つまり12歳になると制服が変わり、学科も分かれる。総合科、魔法科、国文学科、軍学科、法学科、商工学科。他の専門職に進む予定の人は、ここで他の学校に行つたり店で修業したりする。私とコウキは、研究室を借りやすいからといつづでもいい理由で魔法科に進学した。

総合科は普通科みたいなもので、だいたい満遍なく学べる。魔法科は魔法や鍊金術、また最近は科学も含む研究関係を主に学ぶ。軍学科は王国軍や騎士団（＝S.P.みたいなもの）などへの訓練。国文学科は歴史や国の事、文学とかいろいろ。法学科は国家公務員（＝城の文官）になるための勉強が出来る。商工学科は工芸や服飾や食品関連と、計算とかの商売関連。

学校には寮があるが、研究室という形で小さな家も借りられる。敷地がバカみたいに広くて、半ば町のようになつてているのだ。学園都市というやつか。そして魔法街ソシエラと呼ばれる地帯には研究室が立ち並び、その手の店も大量に並んでいる。

そんな家々のひとつが、私とコウキの研究室だ。寮の部屋は無いので、ほぼここで暮らしている。……まあ、同棲と言つても差し支

えない気がする。『どうしてこうなった！

魔法科は他の学部よりも研究色が強いので、授業は最低限出るだけでいい。1つの授業につき週に1、2回くらいだろうか。次までは自己負担、課題の薬品や道具を作成していくこと、とそんな感じである。あとレポートとかね。

唯一週3回きっちりあるのは、魔法戦闘学。戦闘系魔法の実習授業だ。これはまあ、一応問題ない。前より魔力は少ないけど、それでも手数が遙かに多いのだ。

ついでに、忘れかけていたけど精霊のいとし子なんて肩書きもあるので、相手が勝手にビビッてくれる。どこから精霊に叩かれるかと脅えるのだろう。いや、いくら何でも1対1の戦いにちょっとかいは出せないんだけどね。

「ま……参りつゝ、ました……」

「そう」

そして圧倒的に強いのがコウキである。

最初こそ皇太子だからと手加減する者も居たが、それはそれで容赦なく叩きのめすので段々本気でぶつかるよつになつた。それでも、コウキに敵う人は居ない。

仕方なく、相手は魔法で、コウキは剣で戦う事にしてみたりした。でもやっぱコウキが勝つのだから末恐ろしい。

ついでに成績も良い。といつても私は精霊知識で、薬や道具もずっと効率のいい方法で作れるからチートみたいなものだ。コウキは素で成績優秀だけど。

そんな感じで、半ば同棲生活な学生生活は過ぎていった。

前世……日本に居た頃より穏やかに見えるのは、多分、あの頃より更に四六時中一緒に居るからだな。」こちらに来てからとも違い、私が死んでも居ない事もある。

「このまま平和的な方向に成長すればいいなあと思いつつ、14歳になつた。

「ミーナ、これ飲んでみて」

「……何それ？」

「媚薬」

突きつけられた桃色の液体の入つた瓶を受け取る。
無言でテーブルに置いた。待て、待て待て、この色に匂い!
ちよつ、アウトアウトアウトおおおおお!

「……個人が作つてはいけない薬品、ミツビシソーバー!」

「媚薬。洗脳薬。致死毒」

「分かつてるのに作るな!」

そして飲ませてどうする気なの!? 何なの!? 襲うの!?
方向性がますますやばい気がしてきたが気のせいだと思いたい。
学科が学科だから、どんどん危ない薬ばかり覚えていく。そのう
ち盛られそうで恐ろしい。

「ああ、そうだ」

残念そうに媚薬を廃棄薬品用のバケツに流し入れる。浄化魔法を施してあるので、何を入れても分解してくれる便利な品だ。

何を言つのかと思えば、ずい、と顔が迫つてきて思わずのけぞる。

「な、なに?」

「結婚しよう」

手に持っていた薬包紙が包みから抜けて全部床に落ちた。私はあまりの衝撃に、しばし瞬きすら忘れ、ぼんやりと床に落ちたそれらがもう使い物にならないと思い、あーあと残念に感じ、そのまま靴の先を見つめ、は、と我に帰る。

「「めん今何て言った?」

「結婚しよう」

「うわああああ……」

遅れてきた衝撃によろめく。机にぶつかり、液体や気体の詰まつたガラス珠が沢山入った籠が音を立てる。慌てて体制を戻し、心臓を押さえ、はー、と息を吐いた。

「び、びびびびっくりした……」

「何で?」

「そんなまともな事言わると思つてなくて」

そう言いつつ、足から力が抜けていった。あれ、目から汗が。苦節數千年、ようやくまともな人間に……！

「ウキが腕を伸ばして私の腰を支えた時、突如研究室の扉がばあんと開く。

え、何?

「//コシアナ・レーヴィン！　国家反逆罪にて連行する！」

……は、

「はああああー!?

抜けた力がますます抜けた。呆然としながらもコウキの袖口を掴む。

国家反逆罪。寝耳に水すきじ、ぱくぱくと口を開け閉めしていると

不意に視界が闇に覆われ、ぶつ、と意識が途切れた。

あーなんかこいつまたデジャヴが。

大変見覚えのあるあの時よりは少し寂れたような榮魔殿のベルンダで、実習用の黒いローブと白衣姿で私は一人の青年とお茶していった。

今回のお茶の相手は魔王陛下（そういうやあの人どうなったのかな）ではなく。

「母さんと暮らすためにちゃんと手入れしてたんだ

「は、はあ……」

「ベッドは買い換えたんだ。父さんの体液とか付いてたらやだし」

「な、生々しい……! ジゃなくて、無いからね! 流石に息子と結婚は無い!」

相変わらず物言ひがえぐい息子でした!

……まだ結婚していないの!? いいかげん諦めろー。

「別にいいじゃん、愛の前に血縁なんて関係ないよ
「百歩譲つて兄弟姉妹なら……せ、ギリギリないことも……ないけど……
親だけは無い!」

「ふーん。じゃあ兄に生まれればよかつたのかな」「いやいやいやせめて他人に生まれてよ！」

「いっそ、父さんの弟とかだったら違和感無いのになあ」

「それは……いや、うん、勘弁して……」

……10代になる前に過労死してんじゃないかな？ 1人でも大変だったのに追加は勘弁してください！

「……ねえ、母さん、俺ね」

ティーカップを置く無機質な音が響く。かつて1匹残らず魔物を駆逐されたとはいえ、このあたりは穢れた地として今も人は住まない。世捨て人くらいか。

それどころか染み付いた匂いのせいで動物も居ない。

静寂の中で、ほとんどその声しか聞こえない。

「何回も、何回も何回も何回も、母さんと父さんが生まれ変わるのが見てきた」

「……え？」

一瞬、理解できなくて呆ける。カップのあたりを彷徨つていた右手に、過ぎた年月を感じさせない若々しい手が伸びてきた。

銀色の双眸が、今は混沌を煮て固めたように暗く見える。

「でも母さんってば、一回だって俺の事なんか覚えてなかつたし、俺に靡いてもくれなかつたよ。父さんが過保護だから、ずっとくつついてて」

手を捉まれると、蛇に睨まれた蛙のように何も言えなくなる。

……つこ、こ、怖いんだけど！ 満樹、恐ろしい子！

それより、そんなに転生してたのか私たちかー！？

「……前の時も……嫌いなんて言つから」

ぎり、と手首に力が込められる。

……前世の私め、記憶が無いとはいえたんという事を！

「いつやつてね」

すい、ともう片方の手が首に伸びる。そう大きくなーテーブルだが、私では反対側まで届きはしないだろう。向かいから届く長い腕から逃れようとすると、手を引かれる。

大きな手は、僅かに14歳でしかない私の首を日々と絞められる。片手でも、絞め殺せる。

「殺そうとした」

ひゅ、と息を呑む。湧き上がる恐怖に唇を引き結んで堪える。どうしてか。

怖いのは私なのに、泣きそうな顔をしているのは満樹の方だった。

「なのに、殺したのは父さんだった。母さんも、父さんならいいやつで……訳わかんないよ。何で、どうして殺されてもいいなんて、言えるのか、わからない。理解できない」

「……やつ、言われても」

その時の記憶など無いのだから、聞かれても困るといか言えない。ただ、確かに。

本気で光輝が私を殺そうとしたとして。

それを拒む光景とこゝのも、なかなか思い浮かばない。

「難しいね」

「難しいよ」

泣きそつた顔のまま、満樹は両手を離した。軽く咳き込む私の前で、袖で軽く目を拭う。

難儀なものだ、恋やら愛やらは。

心底苦労した私が言つのだから間違いない。

「続けるのも苦しいのに、諦めるのも難しいし。どうしたらいいと思つ？」母さん

「私に聞いても意味ないって……」

「じゃあ」

満樹は椅子を引いて立ち上がる。そして、少し吹っ切れたように言つた。

「振つてよ。きつぱりはつきりと」

「そもそも振る振らないの問題じゃないんだけど……うん。息子としては愛してるよ、満樹」

私としては、非常に大盤振る舞いな言葉だ。愛してるなんて、光輝相手にも滅多なことでは口に出さない。自分の気持ちが本当にそうなのか、分からぬから。

だから、何の躊躇いもなく感情を表せる彼らが、少し羨ましくもあつた。

真つ直ぐな彼らと違つて、私はぐねぐね捻じ曲がっている。

いや、真つ直ぐにアレな方向に向かってるから性質が悪いんだけど。

「ありがとう」

そして彼は、本当に嬉しそうな笑顔でそう言った。

同時に、すぐ横に魔法陣が現れる。淡く発光したそこから

「ハーナー」

「ぐえい」

一直線に、ハウキが飛び出す。

きつく抱き締められて、首を絞められた先程より息が止まって呻く。ハウキは満樹など気にせず 気づいてはいるのだろうけど、全く意に介さない。暫くしてからぴくりと眉を顰める気配がする。

「誰の臭い……？」

口に出して問いかがらも、答えははっきり分かつてこないで、肩越しに満樹を睨みつけているのが分かる。私は未だ押しつぶされてひゅーひゅーと喉を鳴らしていた。

ちょ、く、苦しいから！

「ちよつと、母さん死にそうなんだけど。何回殺せば気が済むの？」

「何のこと？」

「……ああ、今度はいつかが忘れてるんだっけ」

既にあの頃と同じ、陽気な声が聞こえたことに安心した。

つてか何回殺せばって突つ込みどころ満載の台詞が聞こえた気がする。え……え、ちよつと……聞いた方がいいのこれ。すつごい気になるんだけど。

「母ちゃんを不幸にしたら、国！」と滅ぼすからね」

は！？

「まあ母さんの父親とかに洗脳掛けたのは俺だけど」

ああ、それにしても、そろそろ締められすぎて視界が霞んできただ。

「洗脳……やっぱりね。兵を洗脳したのかとも思つたけど」

多少暗示は掛けさせてもらつたけれどねまあ今頃頭抱えてるん
じゃない?まさか、それくらい解決できない訳が無いよね?あ
ははは」

記憶が無いからつて好き放題してゐるし……ああもう、こいつらは本当に……もう……あああ手の掛かる……！
そろそろほんやりしてきた意識の向こうに、機嫌最悪のコウキの声と、楽しげな満樹の声。

ああ、なんだ、よくあることだ。

ほんやうつせつ思つた時、ついにぶつんと意識が途切れた。

田を覚ますと、どこかのベッドで寝ていた。

白衣とローブは脱がされて、中に着ていた白のカツター・シャツとスラックスだけになつてゐる。薬を扱うので魔法科の棟は気温が低

く、スカートだとたまに寒いからだ。あと楽だから。

「う……ん？ うわ」

後ろには十中八九コウキであろう人が寝ていて、背中から抱きつかれている。そして回された腕と私の腕に、数字の8のような連なった輪が付いていた。

さながら、手錠のようだ。

……解析してみると、どうやら元は2つの輪で、近づくと磁石のようにくっ付く。対になった2つの片方の主だけが取り外しを自由に出来る。また着脱も同じ、その他色々みたいな魔法が……ああ積んだあああああ！

「//ーナ？」

「……あ、はい」

「おはよ！」

繋がつた左手の手首。ああ嫌な予感しかしない！

私の腕輪はプラチナっぽい金属で、真ん中に1本黒いラインが入っている。コウキの方は全体が黒、赤いライン入り。接着される場所には黒い球体があり、どうやら角度が自由に調節できるらしい。解析によれば、1メートル程までなら鎖が出る。鎖……！？ そして腕輪は右腕にも付いていた。ひいいいい！

「聞きたい事は色々あるけど」

「う、うん」

一瞬だけ手じよ 腕輪が離れる。離れたかと思つと反対の手がくつ付いて、ついでに体を回されて向かい合わせになつた。まつ、ちょ、待つて待つて待つて何すんの！？

「結婚しよう」

二度目だ。
ここへか、ベッドのせいでかと感ひ。

一
うん

一也は少し嬉しけに笑って、腕輪を離して腰を引き寄せた。口
一也を着たままの胸元に顔を埋めると、少しだけ薬品くさいけどい
い匂いがした。

なんだかんだで国内トップのいいとこの坊ちゃんだからね。いい石鹼使つてるんだよね。まあ私も同じの使つてる訳だけど。

— 一
ナ ハ ニ 一 —

h
?

「たゞ、きの男は誰?」

……おわ！？

「コウキが少し離れて、体が横に倒されて仰向けになる。覆いかぶさつたコウキの目が　うわあ黒いよ真っ黒だよ！　ちょ、死亡フラグ立つた！　いや結構前に立つてたのかないやそんのはどうでもいいけど誰かたつ、

「ねえ、ミーナ。本当に、部屋に閉じ込められていても困ってあげたくないのに。……どうで他の男と知り合つたりしたの？ ちゃんと答えないと、どうしようかな」

助けてええええええ…！

飲み込んだ悲鳴。飲み込まれるを得ないというか……ええ、その。お察しください！

翌日、私は本気でベッドから起き上がりなくなつたのであった。

その後。

婚約状態で学校を卒業し、私とコウキは更に研究院に進んで魔法関係の発明で一山当てたりした。で、卒業と同時に結婚式。

今回は皇太子と宰相の娘というそれなりにそれなりの身分同士なので、国を挙げての結婚式である。黒い衣装に今度はちゃんとしたベルを付けて、一時どつなるかと思われたけどまた立派にワーカーホリックな父と腕を組んで歩き、そして眞面目に結婚式。

前回を考えると本当に眞面目だ。ついでに、その、うん、結構、かつこいいんじゃなかろうか、コウキは。今更か。

更にそれから数年皇帝としての仕事を学んだ。そして陛下が「俺、旅に出るわ」と妻を道連れに流浪の世界ツアーに出た。ついでに退位していくので、コウキが即位した。

……最後まで適當だなあの人。

皇妃とか何すりやいいんだよと思つたけど、案外暇というか、多

分やるべきことはあるんだ」ついで全部「ウキが処理してた。人前に殆ど出してもらえません！

例の満樹の事件を解決し、更に数々の発明をしていくウキは賢王と名高い。私もそれなりに色々してるし、あと自分でも忘れかけてた精霊のいとし子（爆笑）という肩書きもあり、更には“「ウキ”と“ミーナ””という名前も手伝って支持率は高い。私の愛称だけ。

そんな訳で。

色々あつたし、今でも氣苦労は耐えないし、夫はヤンデレだけど。
挾啓、遠い異世界のお母さんお父さん、私は多分幸せです。
……多分ね！

生まれ育つた大陸とは違う地で、俺はぼんやり空を見上げて溜息を吐いた。

「……ま、『褒美だと思つべきかな』

田を閉じずとも、空に正確に描ける。好きで好きで好きでしょう

がない、狂おしいほど愛しくて夜も眠れないような、その人の顔を。

「あは」

息子としてでも、愛してると言われて死ぬ程嬉しかった。嬉しくて嬉しくて仕方ないのに、どうしてか、涙が零れる。

あの人は、生まれ変わったって、記憶が無かつたって、たとえどんな事になろうとも俺の事を恋人とは思ってくれないのだから。

母は実の所、とても懐が広い人だ。

なんでもかんでも許容して、文句を言いながらも本気で拒絶することはない。

父がどんなに身勝手に愛を注いでも、けして壊れることもない。

「……はは、は」

けれど、俺の愛だけは受け取ってはくれない。分かっているけど、胸が苦しかった。

両親が転生する事は、知っていた。父が転生する前に言っていたからだ。

なら一度くらいは奪い取れると思っていた、のに。

兄と妹に生まれようが、王族と奴隸に生まれようが、はたまた天地に別たれていようが、必ず出会うし、必ず結ばれて、必ず一緒に死んでいく。

俺はただ、何度も何度も置き去りにされるだけ。

でも。

「また会いに行こうかな」

何度も置き去りにされたとしても。
記憶が無くても、人格が違っても、見た目が違っても。

あれは、俺の父と母なのだ。

だからたまに、里帰りするくらい許してほしい。

いつか両方が元の記憶を持って転生してくれる事を願いながら。
今日も俺は、世界を渡り歩く。

(後書き)

といつわけで超絶蛇足な転生後編でした。

前回・前々回よりちょっと平和。……だらうか。少なくとも首を絞められる回数は減ったと思つ。

美奈の方が怖いというコメントも沢山寄せられましたが、まあ確かに……（否定できない）

彼女は大変打たれ強いです。とにかく心が広く、なんというか。何をされてもあまり揺らがない子。

精神的にはまっすぐ自立していて、どんなに寄りかかるに平気なんでしょう。大木系女子。

逆に光輝は全身全靈で寄りかかって依存する人。

全力で依存したまま根を張つて離れる気もありません。宿木系男子。

光輝のヤンデレっぷりはやや下がりましたが、満樹を書いて満足です。

満樹は略奪が目標ですが、別に三角関係も良くない？と思つてます。独占したいけど、別に父親と一緒にいいかなと思つてます。

美奈としては超絶迷惑ですが。

寿命が無いので、両親が記憶を持つて生まれ変わってくれる事を期待しつつフラフラしてると思われます。

拍手に後日談的な小話があります。そちらもどうぞー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6530y/>

ヤンデレの幼馴染に死んでも愛され続けて転生後

2011年11月20日07時18分発行